

韓国・曹溪宗

新宗正に老天月下方丈を推戴

三月、横浜善光寺留学僧育英会設立十周年記念式典に来賓として出席のため来日された韓国・靈鷲叢林通度寺（曹溪宗）の老天月下方丈が、五月九日に行われた韓国・曹溪宗の元老会議（議長＝慧庵・海印寺方丈）において、満場一致で第九代宗正（任期五年）に推戴されること^が決定。宗正の象徴である拂塵（拂子）と拄杖子を奉呈する宗正推戴式が五月十三日午前十時、曹溪寺（ソウル鍾路区）で挙行された。

老天月下方丈は、性徹和尚とは違った宗正像を示すものと期待されている。性徹和尚はまれ

に見る禅僧で、一生涯、一切の宗団行政に関与しなかつたことで知られた。宗正に推戴された後も、宗内外で「畏敬」の対象であった。

これに対し、老天月下方丈は総務院長等宗団の主要役職を努めた実務肌で、宗徒や国民にも親近な宗正になるものと見られている。

佛教界では、老天月下方丈の人柄を示す多くの逸話がある。

老天月下方丈の住居である通度寺正備殿には垣根に出入りの門がなく、出入りが自由で、訪問客には誰にでも丁重に応対し、建物の外まで

訪問客を送る。門中の最高元老でありながら、通度寺の構内食堂で一般の和尚らと共に食事をすする。侍者らが止めるにもかかわらず、清掃、洗濯も自ら行う。また四月には、曹溪宗改革会議参加のためソウルに出向いた際も、高速バスという大衆交通手段を利用した。

しかし老天月下方丈はまた、宗団の存亡時には強い決断力と実行力を発揮して、中心的役割を果たしてきた。

五〇年代に比丘・妻帯僧間の対立が始まった時、青潭、暁峰、東山、金鳥和尚らと共に、比丘代表五人で宗団浄化を主導。七〇年代の曹溪宗団紛糾の際にも、改革勢力側の代表人物として活動した。徐義玄前総務院長三選で噴出した今回の宗団紛糾にも、早くから長期政権の問題点を指摘して、門中が改革に参加するように指導した。老天月下方丈が改革会議議長に続いて宗正に推戴されたのには、宗団内に培ったこの

ような信望が作用したものとみられている。

老天月下方丈は五月八日、記者（韓国・釜山金貞玉記者）に対し「まだ正式に決定されていないので語ることは難しい」としながらも、宗正の役割とは「宗団が正しく運営できるように、秩序と方向を与えること」と語り、また改革問題に関しては、「一、二人の欲と長期政権から問題が発生したが、彼等が退いたので、秩序を取り戻すことに大した困難はないだろう」と樂觀していた。

老天月下方丈は、忠清南道扶余出身。十八歳の時、金剛山楡岾寺で出家。一九四〇年三宝寺刹中の靈鷲叢林通度寺で九河和尚より比丘戒を受け、その後住職、祖室等を経てからも通度寺を守った。梵魚・徳崇門中に次ぐ靈鷲門中は老天月下方丈の宗正推戴を長く待ちわびていたことである。